

泥濘

梶井基次郎

青空文庫

一

それはある日の事だった。――

待つていた為替かわせが家から届いたので、それを金に替えかたがた本郷へ出ることにした。

雪の降ったあとで郊外に住んでいる自分にはその雪解けが億劫おっくうなのであつたが、金は待つていた金なので関わかまずに出かけることにした。

それより前、自分はかなり根こんをつめて書いたものを失敗に終わらしていた。失敗はとにかくとして、その失敗の仕方の変に病的だつたことがその後の生活にまでよくない影響を与えていた。そんな訳で自分は何かに気持の転換を求めていた。金がなくなつていたので出歩くにも出歩けなかつた。そこへ家から送つてくれた為替にどうしたことか不備なところがあつて、それを送り返し、自分はなおさら不愉快になつて、四日ほど待つていたのだつた。その日に着いた為替はその二度目の為替であつた。

書く方を放棄してから一週間余りにもなつていただらうか。その間に自分の生活はまるで気力の抜けた平衡を失したものに変わつていた。先ほども言つたように失敗が既にどこ

か病氣染みたところを持つていた。書く気持がぐらついて来たのがその最初で、そうこうするうちに頭に浮かぶことがそれを書きつけようとする瞬間に変に憶い出せなくなったりした。読み返しては訂正していたのが、それもできなくなってしまった。どう直せばいいのか、書きはじめの気持そのものが自分にはどうにも思い出せなくなっていたのである。こんなことにかかりあつてはよくないなど、薄うす自分は思いはじめた。しかし自分は執念深くやめなかつた。また止まらなかつた。

やめた後の状態は果してわるかつた。自分はぼんやりしてしまつていた。その不活潑な状態は平常経験するそれ以上にどこか変なところのある状態だった。花が枯れて水が腐つてしまつている花瓶が不愉快で堪らなくなつていても始末するのが億劫で手の出ないときがある。見るたびに不愉快が増して行つてもその不愉快がどうしても始末しようという気持に転じて行かないときがある。それは億劫というよりもなにかに魅せられている気持である。自分は自分の不活潑のどこかにそんな匂いを嗅いだ。

なにかをやりはじめてもその途中で極つて自分はぼんやりしてしまつた。気がついてやりかけの事に手は帰つても、一度ぼんやりしたところを覗いて来た自分の気持は、もうそれに対して妙に空ぞらしくなつてしまつていたのだつた。何をやりはじめてもそういうふ

うに中途半端中途半端が続くようになって来た。またそれが重なってくるにつれてひとりで生活の大勢が極つたように中途半端を並べた。そんなふうで、自分は動き出すことの禁ぜられた沼のように淀よじんだところをどうしても出切つてしまふことができなかつた。そこへ沼の底から湧わいて来る沼気メタンのようなやつがいる。いやな妄想もうそうがそれだ。肉親に不吉がありそうな、友達に裏切られているような妄想が不意に頭を擡もたげる。

ちようどその時分は火事の多い時節であつた。習慣で自分はよく近くの野原を散歩する。新しい家の普請が到るところにあつた。自分はその辺りに転つている鉋かんなくず屑を見、そして自分があまり注意もせず煙草の吸殻を捨てるのに気がつき、危いぞと思つた。そんなことが頭に残つていたからであろう、近くに二度ほど火事があつた、そのたびに漠とした、捕縛されそうな不安に襲われた。「この辺を散歩していたら」と言われ、「お前の捨てた煙草からだ」と言われたら、なんとも抗弁する余地がないような気がした。また電報配達夫の走つているのを見ると不愉快になつた。妄想は自分を弱くみじめにした。愚にもつかないことで本当に弱くみじめになつてゆく。そう思うと堪らない気がした。

何をする気にもならない自分はよくぼんやり鏡や薔薇ばらの描いてある陶器の水差しに見入つていた。心の休み場所——とは感じないまでも何か心の休まつている瞬間をそこに見出いだ

すことがあった。以前自分はよく野原などでこんな気持を経験したことがある。それはごくほのかな気持ではあったが、風に吹かれてい草などを見つめているうちに、いつか自分の裡うちにもちようどその草の葉のように揺れているもののあるのを感じる。それは定かなものではなかった。かすかな気配ではあったが、しかし不思議にも秋風に吹かれてさわさわ揺れている草自身の感覚というようなものを感じるのであった。酔わされたような気持で、そのあとはいつも心が清すがすがしいものに変わっていた。

鏡や水差しに対している自分は自然そんな経験を思い出した。あんな風に気持が転換できるといいなど思つて熱心になることもあった。しかしそんなことを思う思わなかかわいに拘らず自分はよくそんなものに見入つてぼんやりしていた。冷い白い肌に一点、電燈の像を宿している可愛い水差しは、なにをやる気にもならない自分にとって實際変な魅力を持つていた。二時三時が打つても自分は寝なかつた。

夜晩おそく鏡を覗のぞくのは時によつては非常に怖おそろしいものである。自分の顔がまるで知らない人の顔のように見えて来たり、眼が疲れて来る故か、じーつと見ているうちに醜悪な伎ぎ楽がくの腫はれ面おもてという面そつくりに見えて来たりする。さーつと鏡の中の顔が消えて、あぶり出しのようにまた現われたりする。片方の眼だけが出て来てしばらくの間それに睨にらまれて

いることもある。しかし恐怖というようなものもある程度自分で出したり引込めたりできる性質のものである。子供が浪打際で寄せたり退いたりしている浪に追いつ追われつしながら遊ぶように、自分は鏡のなかの伎樂の面を恐れながらもそれと遊びたい興味に駆られた。

自分の動かない気持は、しかしそのままであった。鏡を見たり水差しを見たりするときを感じる、変に不思議なところへ運ばれて来たような気持は、却って淀んだ気持と悪く絡まったようであった。そんなことがなくてさえ昼頃まで夢をたくさん見ながら寝ている自分には、見た夢と現実とが時どき分明しなくなる悪く疲れた午後の日中があった。自分はいつか自分の経験している世界を怪しいと感じる瞬間を持つようになって行った。町を歩いていても自分の姿を見た人が「あんな奴が来た」と言つて逃げてゆくのではないかなど思つてびつくりするときがあった。顔を伏せている子守娘が今度こちらを向くときにはお化けのような顔になつているのじゃないかなど思うときがあった。——しかし待つていた為替はどうとう来た。自分は雪の積つた道を久し振りで省線電車の方へ向つた。

お茶の水から本郷へ出るまでの間に人が三人まで雪で^{すべ}に滑った。銀行へ着いた時分には自分もかなり不機嫌になつてしまつていた。赤く焼けている瓦斯^{ガス}暖炉^{だんろ}の上へ濡れて重くなつた下駄をやりながら自分は係りが名前を呼ぶのを待つていた。自分の前に店の小僧さんが一人差向かいの位置にいた。下駄をひいてからしばらくして自分は何とはなしにその小僧さんが自分を見ているなど思つた。雪と一緒に持ち込まれた泥で汚^{よご}れている床を見ているこちらの目が妙にうろたえた。独り相撲だと思ひながらも自分は仮想した小僧さんの視線に縛られたようになった。自分はそんなときよく顔の赧^{あか}くなる自分の癖を思い出した。もう少し赧くなつてゐるんじゃないか。思う尻^{しり}から自分は顔が熱くなつて来たのを感じた。係りは自分の名前をなかなか呼ばなかつた。少し愚図過ぎた。小切手を渡した係りの前へ二度ばかりも示威運動をしに行つた。とうとうしまいに自分は係りに口を利^きいた。小切手は中途の係りがぼんやりしてゐたのだつた。

出て正門前の方へゆく。多分行き倒れか転んで気絶をしたかした若い女の人を二人の巡查が左右から腕を抱えて連れてゆく。往來の人が立留つて見ていた。自分はその足で散髪屋へ入つた。散髪屋は釜を壊^{こわ}してゐた。自分が洗つてくれと言つたので石鹸で洗つておき

ながら濡れた手拭てぬぐいで拭くだけのことしかししない。これが新式なのでもあるまいと思つたが、口が妙に重くて言わないでいた。しかし石鹼の残っている気持悪さを思うと堪たまらない気になった。訊たずねて見ると釜を壊したのだという。そして濡れたタオルを繰り返した。金を払つて帽子をうけとるとき触つて見るとやはり石鹼が残っている。なんとか言つてやらないと馬鹿に思われるような気がしたが止めて外へ出る。せっかく気持よくなりかけていたものと思うと妙に腹が立つた。友人の下宿へ行つて石鹼は洗いおとした。それからしばらく雑談した。

自分は話をしているうちに友人の顔が変に遠どおしく感ぜられて来た。また自分の話が自分の思う甲かんじ所ところをちつとも言つていないように思えてきた。相手が何かいつもの友人ではないような気にもなる。相手は自分の少し変なことを感じているに違いないとも思う。不親切ではないがそのことを言うのが彼自身怖おそろしいので言えずにいるのじゃないかなど思う。しかし、自分はどこか変じやないか？ などこちらから聞けない気がした。「そう言えば変だ」など言われる怖ろしさよりも、変じやないかと自分から言つてしまえば自分自分の変な所を承認したことになる。承認してしまえばなにもかもおしまいだ。そんな怖ろしさがあつたのだつた。そんなことを思いながらしかし自分の口は喋しゃべっているのだつ

た。

「引込んでいるのがいけないだよ。もつと出て来るようにしたらいいんだ」玄関まで送って来た友人はそんなことを言った。自分はなにかそれについても言いたいような気がしたがうなずいたままで外へ出た。苦役くえきを果した後のような気持であった。

町にはまだ雪がちらついていた。古本屋を歩く。買いたいものがあつても金に不自由していた自分は妙に吝嗇けちになつていて買い切れなかつた。「これを買うくらいなら先刻さつきのを買う」次の本屋へ行つては先刻の本屋で買わなかつたことを後悔した。そんなことを繰り返してはいるうちに自分はかなり参つて来た。郵便局で葉書を買つて、家へ金の札と友達へ無沙汰の詫わびを書く。机の前ではどうしても書けなかつたのが割合すらすら書けた。

古本屋と思つて入つた本屋は新しい本ばかりの店であつた。店に誰もいなかったのが自分の足音で一人奥から出て来た。仕方なしに一番安い文芸雑誌を買う。なにか買つて帰らないと今夜が堪たまらないと思う。その堪らなさが妙に誇大されて感じられる。誇大だとは思つても、そう思つて抜けられる気持ではなかつた。先刻の古本屋へまた逆に歩いて行つた。やはり買えなかつた。吝嗇臭いぞと思つてもどうしても買えなかつた。雪がせわしく降り出したので出張りを片付けている最後の本屋へ、先刻値を聞いて止よした古雑誌を今度

はどうしても買おうと決心して自分が入って行った。とつっきの店のそれもとつつきに値を聞いた古雑誌、それが結局は最後の選択になったかと思うと馬鹿気た気になった。他所よその小僧が雪を投げつけに来るのでその店の小僧はその方へ気をとられていた。覚えておいたはずの場所にそれが見つからないので、まさか店を間違えたのでもなからうがと思つて不安になつてその小僧にきいてみた。

「お忘れ物ですか。そんなものではありませんでしたよ」言いながら小僧は他所よそのをやつつけに行こう行こうとしてうわの空になっている。しかしそれはどうしても見つからなかつた。さすがの自分も参つていた。足袋を一足買つてお茶の水へ急いだ。もう夜になつていた。

お茶の水では定期を買つた。これから毎日学校へ出るとして一日往復いくらになるか電車のなかで暗算をする。何度やつてもしくじつた。その度たびに買うのと同じという答えが出たりする。有楽町で途中下車して銀座へ出、茶や砂糖、パン、牛酪バターなどを買つた。人通りが少い。ここでも三四人の店員が雪投げをしていた。堅かたそうで痛いたそうであつた。自分には不愉快に思つた。疲れ切つてもいた。一つには今日の失敗しくじり方が余りひど過ぎたので、自分は反抗的にもなつてしまつていた。八銭のパン一つ買つて十銭で釣銭を取つたり

などしてしきりになにかに反抗の気を見せつけていた。聞いたものがなかつたりすると妙に殺氣立った。

ライオンへ入って食事をする。身体を温めて麦酒^{ビール}を飲んだ。混合酒^{カクテル}を作っているのを見ている。種々な酒を一つの器へ入れて蓋をして振っている。はじめは振っているがしまいには器に振られているような恰好をする。洋盃^{グラス}へついで果物をあしらい盆にのせる。その正確な敏^{びんしょう}捷^{しやう}さは見ていておもしろかった。

「お前達は並んでアラビア兵のようだ」

「そや、バグダツドの祭のようだ」

「腹が第一減っていたんだな」

ずらつと並んだ洋酒の壘を見ながら自分は少し麦酒の酔いを覚えていた。

三

ライオンを出てからは唐物屋で石鹼を買った。ちぐはぐな気持はまたいつの間にか自分に帰っていた。石鹼を買ってしまったて自分は、なにか今のは変だと思いはじめた。瞭然^{はつき}り

した買いたさを自分が感じていたのかどうか、自分にはどうも思い出せなかった。宙を踏んでいるようにたよりない気持であった。

「ゆめうつつで遣やつてるからじゃ」

過失などをしたとき母からよくそう言われた。その言葉が思いがけず自分の今し為たことのなかにあると思った。石鹼は自分にとって途方もなく高た価かい石鹼であった。自分は母のことを思った。

「奎けい吉きち……奎吉！」自分は自分の名を呼んで見た。悲しい顔付をした母の顔が自分の脳の裡うりにはつきり映った。

——三年ほど前自分はある夜酒に酔って家へ帰ったことがあった。自分はまるで前後のわきまえをなくしていた。友達が連れて帰ってくれたのだったが、その友達の話によると随分非道ひどかつたということで、自分はその時の母の気持を思つて見るたびいつも黯あん然ぜんとなった。友達はあとでその時母が自分を叱つた言葉だと言つて母の調子を真似てその言葉を自分にきかせた。それは母の声そっくりと言いたいほど上手に模もしてあった。単なる言葉だけでも充分自分は参つているところであった。友人の再現して見せたその調子は自分を泣かすだけの力を持っていた。

模倣もほうというものはおかしいものである。友人の模倣を今度は自分が模倣した。自分に最も近い人の口調はかえって他所から教えられた。自分はその後に続く言葉を言わないでもただ奎けいきち吉と言っただけでその時の母の気持を生きいきと蘇よみがえらすことができるようになった。どんな手段によるよりも「奎吉！」と一度声に出すことは最も直接であつた。眼の前へ浮んで来る母の顔に自分は責められ励まされた。——
空は晴れて月が出ていた。尾張町から有楽町へゆく鋪道ほどうの上で自分は「奎吉！」を繰り返した。

自分はぞーつとした。「奎吉」という声に呼び出されて来る母の顔付がいつか異ちがうものに代つていた。不吉つかきどを司る者——そう言ったものが自分に呼びかけていたのであつた。聞きたくない声を聞いた。……

有楽町から自分の駅まではかなり時間の時間がかかる。駅を下りてからも十分の余はかかつた。夜の更ふけた切り通し坂を自分はまるで疲れ切つて歩いていた。袴はかまの捌さばける音が変に耳についた。坂の中途に反射鏡のついた照明燈が道を照している。それを背にうけて自分の影がくつきり長く地を這はつていた。マントの下に買物の包みを抱えて少し膨ふくれた自分の影を両側の街燈が次には交互にそれを映し出した。後ろから起つて来て前へ廻り、伸びて行

つて家の戸へ頭がひよつくり擡もちあがつたりする。慌あわただしい影の変化を追っているうちに自分の眼はそのなかでもちつとも変化しない影を一つ見つけた。極く丈の詰った影で、街燈が間遠になると鮮あややかさを増し、片方が幅を利かし出すとひそまってしまふ。「月の影だな」と自分分は思った。見上げると十六日十七日と思える月が真上を少し外れたところにかかっていた。自分は何ということなしにその影だけが親しいものに思えた。

大きな通りを外れて街燈の疎まばらな路へ出る。月光は初めてその深祕さで雪の積った風景を照していた。美しかった。自分は自分の氣持がかなりまとまっていたのを知り、それ以上まとまってゆくのを感じた。自分の影は左側から右側に移しただけでやはり自分の前にあつた。そして今は乱されず、鮮かであつた。先刻自分に起つたどことなく親しい氣持を「どうしてなんだろう」と怪しみ慕なつかしみながら自分は歩いてきた。型のくずれた中折を冠り少しひよわな感じのする頸くびから少し嚴いかつた肩のあたり、自分は見ているうちにだんだんこちらの自分を失つて行つた。

影の中に生き物らしい氣配があらわれて来た。何を思っているのか確かに何かを思っている——影だと思つていたものは、それは、生なまなましい自分であつた！

自分が歩いてゆく！　そしてこちらの自分は月のような位置からその自分を眺めている。

地面はなにか玻璃はりを張ったような透明で、自分は軽い眩暈めまいを感じる。

「あれはどこへ歩いてゆくのだろう」と漠とした不安が自分に起りはじめた。……

路に沿うた竹藪たけやぶの前の小溝こみぞへは銭湯で落す湯が流れて来ている。湯気が屏風びょうぶのよう
に立騰たてっていて匂においいが鼻を撲うつた——自分はしみじみした自分に帰っていた。風呂屋の隣
りの天あまぶら屋はまだ起きていた。自分は自分の下宿の方へ暗い路を入って行った。

青空文庫情報

底本：「檸檬・ある心の風景 他二十編」旺文社文庫、旺文社

1972（昭和47）年12月10日初版発行

1974（昭和49）年第4刷発行

初出：「青空」青空社

1925（大正14）年7月号

※表題は底本では、「泥濘《でいねい》」となっています。

※編集部による傍注は省略しました。

入力：j.ujiyama

校正：野口英司

1998年9月12日公開

2016年7月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

泥凜

梶井基次郎

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>